

うつつにはなし

おとぎばなし

※朗読劇

◎登場人物

主宰 めがねパーティーの主宰。元絵本作家。

副主宰 めがねパーティーの副主宰。ゲームなどとにかく楽しいことが好き。

女性 主宰の絵本のファン。彼をパーティーから取り戻そうとしている。

少年 現実主義。ふわふわした言い回しやよくわからないことが大嫌い。

黒縁 少年がパーティーで出会う男。おとぎ話と水玉が好き。

水玉 黒縁と一緒にいる少女。



主宰 彼女の細い腕は白く、いっそ青く、透けてしまっそうだった。

或る夜、あの夜、いよいよ彼女の手は透き通り、空気に溶けてしまわんとしていた。僕はその手を取って、ああ、なんとかその色彩を取り戻そうとするのだった。

主宰 「ねえ 大丈夫かい？ よもやこのまま、消えてしまったりしないよね」

少女 彼の大きな手が、私の手を握る。

けれど私は、私自身が、彼の指の隙間をすり抜けていくのがわかってしまうのだ。きっともう長くはここに留まれないと、そのとき私は彼の目を見た。

少女・主宰 硝子の レンズ越しの

少女 あなたの

主宰 僕の

少女・主宰 目を

少女 「もしも私が消えてしまっても 待っていてちょうだい

黄泉の道は暗いというけれど きっと会いに来るわ
だからあなたも ねえよく見てちょうだいね」

*

主宰 「ようこそお越しくださいました 紳士淑女の皆さま

ようこそお越しくださいました 視力と心の弱い皆様

ご存じ今日も世界は歪み、まったく直視に耐え兼ねていきましょう！

歪んだ世界と向き合うために、我らの視界を矯正しましょう」

副主 「どうぞ楽しんでごゆっくり、美味しい料理もお酒もたっぷり

主宰 「向き合えない現実ならば、向き合えるようにしたらいい」

黒縁 「誰もかれもが優しい会場 誰もかれもが夢見る表情」

主宰 「招待の条件はたったのひとつ

現実をゆがめてみるための、あなたのめがねただひとつ」



Aパート

（主宰と副主宰、向かい合って本を開いている（ババ抜き））

主宰 会場はほの暗く、本日の客たちをお利口に待っていた。

皺ひとつないテールクロス、そのうえを彩る絢爛で豪華な食事たち。

てらり脂をまとったチキン、瑞々しいサラダ、ゼリーの中にはごろごろと

フルーツが浮かび…

主宰を遮って副主が台詞を引き取る。

副主 赤と白とロゼの液体は、外気を纏うのを今か今かと待っている。

くもりないシャンパングラスだって、満たされるのを心待ちに…

主宰に止められる

主宰 「きみはせっかちだ」

副主 「いいじゃない、少しくらい」

主宰 「よかあないよ、僕らは開催側なんだぞ」

副主 「だからこその特権でしょ？」

主宰 「だめ。はい、あがり」

副主 「あー！ わたしの隙をついたわね！」

主宰 「生憎、君の手元に2枚、僕の手元に1枚になった時点で勝敗は決まっていたよ」

副主 「ババ抜きには自信があるのに」

主宰 「ふつう、ババ抜きはふたりでやらないからね」

副主 「じゃあ、次の一戦わたしが勝ったら一口味見。ね？」

主宰 「いや、だめだよ」

副主 「行くわよ。せーの」

主宰 「ちょっと」

主宰、副主宰、本を額に当てる

副主 「数字の大きいほうが勝ちよ」

主宰 「インディアンポーカーも一騎打ちするものじゃないだろう」

副主 「楽しければいいのよ」

主宰 「楽しいのかい？」

副主 「パーティ会場で起きることは全部楽しくあるべきよ」

主宰 「それは確かに。違うない」

副主 「わたしは下りないわ。あなたは？」

主宰 「僕も下りない」

副主 「じゃあ行くわよ。せーの」

主宰 「6」

副主 「2：わたしの負けだわ！」

主宰 「そうだね」

副主 「悔しい。次は大富豪で勝負よ」

主宰 「大富豪もふたりでやるの？」

副主 「彼の語尾に重なるように、遠くでドアのきしむ音がした。

そしてそれに続くのは、軽やかに床をたたく足音。

主宰 こつ

副主 こつ

主宰 こつ

副主 「ちょうどいいところに、最初のお客さまだわ！」

主宰 「ハイヒールの足音だな、とするといった誰だろう」

副主 「三角レンズのご婦人とか、赤縁のレディじゃないかしら」

主宰 「彼女たちがこんなに早く来るかなあ」

副主 「きっとそんな日もあるのよ」

主宰 「そうかなあ。パーティに来る順番はなんだかんだいつも一緒だ。まず僕が来て」

副主 「次にわたし。どうしたって、いつだってあなたが先にいるような気がするわ」

主宰 「当然というものさ。主宰っていうのははじまりからおわりまでいるものだからね」

副主 [かしむ音をたたく足音]

主宰 [靴音、ハイヒールの足音、遠くでドアのきしむ音がした]

副主 [軽やかに床をたたく足音]

主宰 [三角レンズの足音、赤縁のレディの足音]

副主 [彼女たちがこんなに早く来るかなあ]

主宰 [きっとそんな日もあるのよ]

副主 [さあ、僕が来て]



女性「あの」

副主 響いた声は、聞き覚えのないものだった。

彼のパーティの、常連のお客様の声ではなかった。

主宰 振り返った先にいたのは、みたことのない客。

ほの暗い会場のなか、なんだか不思議に浮いているような雰囲気だった。

副主 このとき、彼もわたしも未だ知らなかった。

この見慣れぬ客が彼にもたらず、あんまりに急であんまりに突然で、
つまりはとつても唐突な悲劇を！

主宰「やあ、こんばんは」

女性「こんばんは」

副主「初めましてよね？」

女性「はい」

主宰「ようこそ、僕の主宰する」

副主「メガネパーティへ！」

主宰「それは僕の台詞だ」

副主「たまにはいいじゃない。ねえ、このルールはもうご存知？」

女性「めがねさえかけていれば招待客として扱っていただけると」

主宰「その通り。きみもめがねがよくお似合いだ」

副主「レンズ越しの現実をどうぞ楽しんで」

女性「レンズ越しの現実？」

主宰「おや。君のめがねのその意味は、まだご存じでないのかな」

女性「ええ。教えていただけます？」

副主「あなたのそれは矯正するためのもの」

女性「視力を？」

主宰「いろんなものをさ。きみにとって正しくみるためのものだからね」

女性「なるほど…？ あなたたちも？」

副主「そうよ」

主宰「そうさ」

女性「わかりました。 …あの、ちょっと失礼していいですか」

主宰「ん？」

女性 彼は不思議そうな顔をして、曖昧に笑った。呆けた印象だった。



私はそんな彼に向って、歩を進める。 一歩

副主 二歩

主宰 三歩…

女性 腕をのばす。彼のめがねの弦に、ゆっくりと指をのばす、そして

女性、主宰からめがねをとる。そしてそれを床にたたきつける。

主宰 「え？」

沈黙。主宰拾おうとする。女性、本で主宰を殴る。

主宰 「いたっ …え？」

沈黙。主宰、懐から別の眼鏡を出すが、叩き落とされる。

女性 「こんばんは。あなたをこのパーティから連れ戻しに来ました」

女性、足元のめがねを踏む。割れるSE

主宰 その音は ぼくのめがねの割れる音は まさしくこの平穩が崩れる音だった―

主宰 「(ハッととして) 副主宰、衛兵！」

副主 「え？」

主宰 「衛兵だよ！ これはテロだっ、テロだよ」

副主 「テロ??？」

主宰 「主宰である僕のめがねを壊したんだ。テロに決まってる！」

副主 「わ、わかった」

女性 「わたしのこと追い出すすんですか？ ちゃんとめがねかけてきたのに。
ルール守ってるのに」

主宰 「それは…そうだけど」

副主 「衛兵―！ 衛兵！」

女性 「まあこれ伊達なんですけどね」

主宰 「反則じゃないか！」

女性「伊達は反則なんてルール聞いてません」

主宰「今ぼくが作ったんだ」

女性「それこそ反則です」

主宰「このパーティの主宰は僕だよ。僕が決めたならそれがルールだ！」

副主「…けれど、主宰の制定したこのルールは、まるで守られることがなかった。

どうしてかって、それから毎日彼女はやってきて、

主宰と攻防戦を繰り返すだけだから！

女性「こんばんは」

主宰「うわっ。だ、伊達眼鏡じゃだめだって言ってるだろ！」

副主「でも、それで入れちゃうんだもんねえ」

女性「その通りです。入れてしまうってことは、受け入れられているってことです」

主宰「このパーティの主宰は僕だぞ。僕がだめって言ったらダメなんだ」

副主「けれど彼の主張はむなしく、願いは聞き届けられないまま

主宰「帰れよう！」

主宰、めがねを奪われる

副主「めがねは彼女に奪われて。」

主宰「帰れってば」

副主「そしてそれは床に落とされ、

女性、めがねを床に落とす

女性「拾おうとしたってそうはさせない。」

主宰、めがねを拾おうとしたところを本で殴られる

主宰「なんで帰らないんだよ…」

女性「それはこっちの台詞なんですが」



主宰、こっそりめがねを拾う

副主 そんなことが幾たびと続くうち、案外彼女の存在は当たり前になっていった。
みやびやかな会場に、彼女の靴音高らかに。
続く主宰の悲鳴はにぎやかに、お客様たちもそんな光景をおだやかに見守るようになっ
ていた。

女性「ごきげんよう」

副主「あら、ごきげんよう。今日は何をしましょうか！」

女性「あなたのお好きなゲームで」

副主「じゃあ、そうね、七ならべがいいわ」

女性「わかりました」

副主「ふふ。負けないんだから」

女性「はい。…あなたは歓迎してくれるんですけどね」

女性「あら。今日もだめだった？」

女性「そうですね。てごわいものです」

副主「彼、スピアを山のように持ってるものね」

女性「そうなんですよ。なんですかスピアって」

副主「手ごわいわね」

女性「はい」

副主「でも、きっと向こうも同じことを思ってるわ」

女性「同じことですって？」

副主「あなたも、てごわいなんですもの」

女性「…あなたも皆さんも彼も、どうしてとは、お尋ねにならないんですね」

副主「どうしてって？」

女性「どうしてわたしがあの人のめがねを壊そうとするのかとか。

パーティから連れて行くかとするのかとか」

副主「どうして、の質問はここではたいてい不躰なもの」

女性「そうなんですか」

副主「彼のパーティのはじまりの挨拶を聞いたことはない？」

女性「ああ、あるような気はしますけど」

副主「視力と心の弱い皆様」

女性「ああ、ありました」

副主「このパーティのお客様は、みんな直視できない歪んだ現実に出会ったの。

だからめがねをかけてるの。そんな人たちにどうしてって聞くのは不躰よ」

女性「なるほど」



副主「そうなのよ」

女性「じゃあ、わたしのどうして、勝手にしゃべってもいいですか」

副主「あら。それはもちろんかまわないわ」

女性 その世界には輪郭がない。黒い、細い、硬い、物体を縁取るものはなにもない。

世界はぼんやりと、けれどたまらなく鮮やかだった。

木漏れ日の森。銀の魚と海の底。もこもこ雲の上。

そんな世界を、少年と少女がぱたぱたつ、ぱたぱたつ、と

かろく かろく 走り回って。

それは、その世界は、たまらなく美しい。

副主「…どういうこと？」

女性「あの人の話ですよ。これはあの人の話です」

副主「というと、主宰の話ということかしら」

女性「そうです、これは彼の話です」

副主「もう一度尋ねてもいいかしら。どういうこと？」

女性「あなたはパーティの外で彼が何をしているかご存知ないですか？」

副主「それを尋ねたら、きつとどうしてめがねをかけてるの、って質問につながるわ」

女性「そうでした。…彼、外では絵本をかくひとなんです」

副主「えほん」

女性「色鉛筆とか、絵の具とか、とにかく、とてもきれいな絵をかくひとなんです」

副主「あら。内容は？ どんなお話？」

女性「しあわせとか、やさしいとか、とにかく、とてもきれいな話をかくひとなんです」

主宰 —それは、うっかり聞いてしまったことだった。ほんとうにうっかりしたことだった。



女性「わたし、よく読んでました。あなたの絵本。大人なのにとって周りから言われても、それでも好きで読んでました」

主宰「…なるほど。きみがにせものの眼鏡でもここに来られてしまうことに納得がいったよ」



女性「いえ、そういうわけではないですが…あの。協力ってどういうことですか？」

副主「あのね、わたし、いつも二番目なの。彼がいなかったら、わたしが一番乗りなのよ」

主宰 ぼくのみていた世界はきれいだ きれい、だった 「だった」…

主宰、ひとりで本を開いている。

主宰 彼女の細い腕は白く、いっそ青く、透けてしまっそうだった。

或る夜、あの夜、いよいよ彼女の手は透き通り、空気に溶けてしまわんとしていた。僕はその手を取って、ああ、なんとかその色彩を取り戻そうとするのだった。

主宰「ねえ 大丈夫かい？ よもやこのまま、消えてしまったりしないよね」

女性、うしろからきて本を覗き込む

女性 彼の大きな手が、私の手を握る。

主宰「うわっ」

女性「ごめんなさい、みえちゃったんで」

主宰「…ああもう、仕方ないや」

主宰、本を女性にも見えるようにする

女性 けれど私は、私自身が、彼の指の隙間をすり抜けていくのがわかってしまうのだ。

きっともう長くはここに留まれないと、そのとき私は彼の目を見た。

主・女 硝子の レンズ越しの

女性 あなたの

主宰 僕の

主・女 目を

女性「もしも私が消えてしまっても 待っていてちょうだい

黄泉の道は暗いというけども きっと会いに来るわ

だからあなたも ねえよく見てちょうだいね」

女性「…これは？」

主宰「僕の」どうして」の一部だよ」

女性「あなたの、「どうして」」

主宰「作家というのは弱くていけないよね。」

分の世界を好きだと言ってくれる人間に対しては、どうしたって形無しだよ」

女性「…まだなんにもわかりません、あなたのどうして」

主宰「きみは相変わらず不睦だね」

女性「長所だと思ってるんで」

沈黙。

主宰のめがねをとろうと、女性身構える。主宰逃げる

主宰「あああもう、今そういう感じじゃなかったろ!？」

女性「すみません」

主宰「しんみりしてたじゃないかいま!」

女性「致し方ないではありませんか」

主宰「致し方なくないよ」

女性「致し方なくなくないではないですか」

主宰「致し方なくなくなく… もういいよ」

女性「不毛ですね」

主宰「よくわかってるね。不毛だよ」

女性「…さっきのお話の少女は、誰なんでしょうか」

主宰「…」

女性「あなたの絵本の少女でしょうか」

主宰「木漏れ日の森。時には海の底を散歩して 時には雲の上で昼寝する」

女性「絵本の少年は、あなただったんでしょか」

主宰「時には少女と笑い 時には少女と泣いて 時には少女と眠った。」

なのに、少女はひとりで眠ってしまった」

女性「傍らにいた少年を遺して、透けて消えてみえなくなってしまったんですか」

主宰 床の間の彼女を思い出す。縁側に通じる障子の向こうから濡れた土の匂いがした。

それに混じる花の香りに意識的に酔って、死の気配をごまかしてしまいたかった。

けれどどんなに鼻をだましたところで、

視界を埋める世界は、くつきりと濃い黒い影の輪郭に縁取られていた。

女性「でもあなたたちは約束したじゃないですか」

女性「必ず会いに来る」

主宰『必ず見つける』

女性「そうでしょ？」

主宰「待ってたよ僕。ずっと待ってた。」

彼女が来たら変わらぬ姿で迎えられるように、
最期のときの服も眼鏡も涙にぬれないように、大切にしておいたのに」

主宰 障子の向こうの花がうつろった。 蠟梅はもったりとあまく、

沈丁花の澄んだ香、夕暮れたち込めるおしろい花、金木犀が華やいで、
それからまた蠟梅が咲いても まるで彼女は、ほんの少しも、

女性「来なかった？」

主宰「しあわせできれいな僕の世界。きみ、僕の絵本が好きならわかるだろ。

あれは僕が見たままの世界だった。

けれど、彼女のいない世界はもうそんな風には見えないんだ。

くつきりと濃い黒い影の輪郭に縁取られているのさ」

女性「じゃあ、そのめがねは？」

主宰「え？」

女性「それが過去の話なら。いま、あなたはレンズ越しになにをみているんですか。

どんなふうに、視界を矯正しているんですか」

主宰「…不躰が過ぎるよ、伊達眼鏡さん」

女性 「どうして」の一部だという過去を語って彼は言う

かつて映した美しい世界は もう失われてしまったのだと彼は言う

それでも、わたしは

副主「ごきげんよう」

女性「副主宰さん」

副主「伊達眼鏡さん。彼のどうして。聞けた？」

女性「…一部なら」

副主宰と女性、なにやら話している

副主「これって、変な話だわ！」

その後もなにか話し合う。副主宰一度座ってなにか調べている。

その間も主宰と女性で攻防戦が続いている日々のアクト。

最後に深呼吸をして。

女性「遊びに行きませんか」

主宰「…え？」

女性「遊びに行くんです」

主宰「どこへ？」

女性「いろいろなところですよ。いろいろなきれいなところ」

主宰「僕はこのパーティの主宰だよ。ここから出るつもりはないんだ」

副主宰、唐突に立ち上がる

副主「行ってきたらいいわ」

主宰「副主宰？」

副主「こんにちは。遊びの誘いに来たのだけど、出かけるところね」

主宰「いいや、僕はどこにも行かないよ。今日は何をするんだい？付き合うよ」

副主「大富豪がやりたいわ。でも、あなたは彼女と行ってきていいのよ」

主宰「きみ、それってどういうことだい」

副主「どうもこうもないことよ」

主宰「けれど、ぼくは」

副主「だって大富豪はいつでもできるわ」

女性「彼女がこうやって言うんだから行きましょう。ね」

主宰「でも」

女性「もし行ってくれたらもうここに来ませんから」

主宰「え？」

女性「あなたのめがね。壊そうとしたりしませんから。どうですか？」

主宰「ほんとうに？」

女性「もちろん、ほんとうですよ。わたしちょっと正直すぎるところがあるんです。

だから嘘はつきませんよ」

副主「たしかにそうね、彼女は正直者だわ」

主宰「ほんとうにほんとうだね。…いいだろう、何処に行くんだか知らないが

きみと一緒に行くんじゃないか」

副主「あなたがいない間は任せて頂戴」

主宰「そうだね。でも、そんなに長くはならないよ」

副主「ほんとうにほんとう？」

主宰「え？」

副主「なんでもないわ。ほらねえ、行ってらっしゃい」

主宰「そんなにせかすことないだろう。きみはせっかちな」

副主「そうよ、わたしせっかちな。あなた以外の人よりあとにパーティに来たこと、一度もないわ」

主宰「それはそうだけど、どうしたんだい」

副主「いいえ、わたしはせっかちな、ってだけの話。お見送りの言葉よ。いつてらっしゃい」

主宰「…ずいぶん変わった見送りの文句だね」

副主「そうかしら。ねえ伊達眼鏡さん、このひとのことよろしくね」

女性「ええ」

副主「楽しんで頂戴ね。ほんとうに」

女性「ええ。あ、その前に」

主宰「ん!？」

女性、めがねをとるポーズ。主宰身構える

女性「ちがいます」

主宰「ちがう!？ なにが!？」

女性「壊しませんから。一回付け替えましょう。出かける間だけ」

主宰「付け替えるだって？」

女性「わたしのと、です」

主宰「きみのと？ きみの、伊達眼鏡だろ」

女性「今日のはちよっとちがうのです。ほらほら」

主宰「でも君の分は？」

女性「スペアがあるので」

主宰「…ええい、これはもう、ああ、どうにでもなれだ。いいだろう」

女性「じゃあ、目を閉じて」

主宰「え？」

女性「度の違うめがね、急にかけると、なんだかぐるんとなるでしょう。だからほら、一度目を閉じて」

主宰、目を閉じる。女性、自分の眼鏡をかける

女性「行きましようか」

暗転

主宰 — 若葉の天蓋のなかだった。頭上で茂る木々の葉の隙間から陽光が差し込んで、



地面にゆうらゆうらと木漏れ日が踊る。

女性 頬を撫でる風はあたたかく、近くに川があるのか、水音がする

柔い土のうえには時折小枝が落ちていて、踏みしめるとぱきっと軽い音がした。

主宰 「ここ、どこだい？」

女性 「森ですよ。きれいでしょ」

主宰 「森っていったい、どこの森だい」

女性 「きれいな森です」

主宰 「そりゃあ、きれいだけどさ」

女性 「そうでしょう」

主宰 「どうして僕ら、こんなところにいるんだい」

女性 「遊びに行こうって言ったじゃないですか。ほらみて。蝶がいますよ」

主宰 彼女が差した先を追えば、青い蝶がひらりひらりと身を翻して舞っていた。

普通こういう蝶には黒い縁取りがありそうなものだが、

その蝶は真性の青をしていた。

羽は透き通っていて、目を凝らすと向こうが見えそうだった。

女性 ほら。とまった。

主宰 すらりと背の高い花のふちに、その蝶が止まった。

ぼくはつい、息をひそめて近づいてゆく。

女性 一歩

主宰 二歩

女性 三歩

主宰 蝶は逃げなかった。僕はその羽をのぞき込んで目を凝らす。

思った通り、向こうが透けて見える。羽の透明な青色に染まった景色が見える。

揺れる木々も 地面も青くみえて それはまるで

女性 海の底みたい。



主宰 蝶が飛んだ。

羽越しにみていたはずの森はもうそこになく、靴裏の感触も変わっていた。

はっと足元をみれば僕が踏みしめているのは軽い白砂で、

屈んで掬えば貝殻が混じっている。

女性 「きれいでしょう」

主宰 「ここは」

女性 「みてわかりませんか？」

女性 銀色の小さな鱗。

色とりどりの魚たちは海藻の間をぐるぐると行き交って、時折ほほを掠めていった。



女性「きれいですね」

主宰「…。雲の上だ。きれい、だけどさ」

女性「だけど、なんですか」

主宰「え？」

女性「きれい、だけど、なんだって言うんですか」

主宰「…そうだね」

女性 やってきたそこはもこもここと、質量感のある入道雲。

口に含んだらさぞかし甘いだろうと、そんなふうにさえ思わせてくれる白い雲。

事実踏み出した足はふかふかと、一歩ごとに沈む感覚。

主宰「きみもみたことがあるだろう。というか、みたことがあるからみえてるんだろう」

女性「この景色をですか？」

主宰「そうさ」

女性「ありますとも、もちろん」

主宰「いったいどこ見たんだい」

女性「あなたの絵本のなかで」

主宰「そうだね。僕の絵本の森に、僕の絵本の海の下だったものな」

女性「ええ。きれいだったでしょう」

主宰「一なにが正直者だ。きみ、騙したね」

女性「なんのことですか？」

主宰「この眼鏡、やっぱり伊達眼鏡だろう」

女性「どうしてそうおもうんですか」

主宰「だって、これは 僕がレンズを通さないで見た景色そのままのもの」

回想

副主「彼のレンズ越しの世界 とっても暗くて、なんだかどんよりしてるの。

曇りの日の日陰みたいなのよ。冷たいの」

女性「暗くて冷たい…」

副主「これって変な話だわ。恋人が死んでしまってきれいな世界がみれなくなったなら、

そんな視界を矯正したなら」

女性「レンズ越しの世界は元の通り美しくなるはず」

回想終わり



主宰 彼女が死んで、たくさん泣いた。泣いて、涙がたくさん流れた。

それならその涙で絵の具を解いて、紙の上に載せてみたい。

少年と少女が手を取れない世界なら、今度はそれに嘆く少年の物語はどうだろう。

女性 少女がいなくなって世界に空いた穴は、あなたにとっては。

その向こうにある、新しい、けれど相変わらずきれいな世界を覗く穴。

主宰 「―おかしんだ。

彼女が死んで、世界は暗く濃く硬い影に縁取られた。

なのに、彼女が帰ってきていないのに、

どうして輪郭のないきれいな世界が戻ってくるんだ。 おかしいじゃないか」

女性 「彼女が死んでも、まだ世界がきれいにみえてしまうんですね」

主宰 「おかしんだ」

女性 「そしてあなたが矯正したかった現実は、その世界を描きたくなる自分自身ですね」

主宰 「世界がきれいにみえるはずないんだ。こんなの、おかしんだ。

めがねを返して。帰ろう、パーティへ。もう帰るんだ」

女性 帰ろう、きつと弱り切った彼はそう言う。

案の定、久しぶりにみた現実から逃げて、思った通りに彼は言う

副主 それだから、わたしが！

女性 カードを揃えて

副主 四枚揃えて

女性 キング

副主 クイーン

女性 エース

副主 最後に、2！

副主 「革命っ！」

主宰 「…は？ …どうして君がここにいるんだい」

副主 「大富豪しようって言ったじゃない」

主宰 「大富豪だって？ え、ああ。さっき言っていた…？」

副主 「大富豪よ」

主宰 「いま？」

副主「いつでもできるって言ったわ。ね」

女性「そうですね」

主宰「まったくわけがわからない。ねえ、でもちょうどよかった、副主宰。帰ろう」

副主「あなた、帰れないわよ」

主宰「え？」

副主「帰る場所なんてないんだわ。だって革命が起きたんだもの！」

主宰「それはゲームの話だろ？」

副主「ゲームの話だけど、わたしずっと準備してたの。彼女とも協力してたわ」

主宰「待って、どういう意味だい？」

女性「あなたはもう、あのパーティの主宰じゃないんですよ」

主宰「はあ？ だって、僕が開催したんだぞ」

副主「代替わりよ。わたしが革命を起こしたの」

主宰「そんなことってあるかい？」

副主「あるの」

女性「あるんですよ」

副主「これからはわたしが、あのパーティの主宰！」

主宰「はあ？」

副主「ご存じでしょ。負けず嫌いなもの、わたし。それにせっかち」

主宰「待ってよ。革命ってそういうことかい？」

副主「そういうことよ」

主宰「いや。大富豪の革命って、順序が逆になるんだろ。」

そしたら2番目のきみは下から2番目になるはずじゃ」

副主「わたしはめがねをかけてるの。パーティには楽しいことだけが起きるの」

主宰「反則じゃないか…」

副主「…あなた、たまに悲しそうだったり退屈そうだったり、そんな暗い顔してるのよ。」

パーティにいるのに。パーティ会場で起きることは全部楽しくあるべきなのに。

それってあなたが本当はこんなところ向いてないからだって、

そういうことなんだって、わたしずっと思ってたのよ」

主宰「でも」

副主「もうあんな顔をしないでいいのよ」

主宰「…そんなに僕はひどい顔をしたかい。僕のパーティなのに」

副主「じゃなきゃこんなことしないわ」

主宰「ほんとうに？ てっきり君のいつもの負けず嫌いかと思ったよ」

副主「それもあるけどね」

主宰「そうだろうよ」

副主「わたし負けず嫌いだし、それにやっぱりせっかちだわ。」



…ほんとはあなた、わたしより先に彼女と話すべきだっていうのに」

女性 副主宰はにっこりと笑った。そのまま彼女の唇が「一抜けた」と動く。

瞬間、あの懐かしいパーティの匂いがした。

蝋燭の灯りがちらついて、穏やかな音楽が耳をくすぐって、そして

鍵が閉まる音

女性 扉の閉じる音がした。

主宰 「…本気で僕を閉め出したな」

女性 「そうですね。…ねえ、帰れないんですって」

主宰 「そうらしいね」

女性 「パーティの中に帰れないなら、パーティの外に帰るっていうのはいかがでしょう」

主宰 「描きたくないんだ」

女性 「ほんとは描きたいって、さっきだって」

主宰 「それで本当に描いてしまったら、

彼女が死んだ悲しみを、絵本を描く材料にしたみたいだ！」

女性 「あなたは彼女と過ごしたしあわせを材料にして絵本を描いたじゃないですか」

主宰 「悲しみってものは、もっと違うあるべきだ。静かに、沈むべきなんだ。

僕だってそうできる。できるよ…」

女性 「あなたは悲しみをそんな風に扱えないのに」

主宰 「きみは、きみってやつははちゃめちゃなことばかり言う」

女性 「副主宰さんが言ってたじゃないですか。めがねをかけて現実を歪めたら

楽しむべきなんです。なのにあなたは、現実を歪めても辛そうなまま」

主宰 「そんなことないよ」

女性 「そんなことあるんです。それなら、現実をみて。

あなたは彼女が死んでもまだ描きたいんです。

彼女のために悲しみにただ沈んでるなんてできないんです

歩いたじゃないですか、きれいな世界を。あれがあなたの世界の現実です。

思い出して、もう一度しっかり見てください」

主宰 …森の中。

空想して、彼女と手をつないで、歩いたぼくのきれいな世界。



女性 海の底。

その世界は絵本になって、誰かに、たとえばわたしに、みせてくれる、同じ優しさを

主宰 雲の上。

…誰かが居なくなっても世界はきれいだ。相変わらず憎らしくらいだ。

女性 パーティ。

ほの明るい会場に、たくさんの料理と美味しいお酒。

あなたが開いて、あなたが作ったあの世界はやっぱり、すごくきれいだった。

主宰 パーティ。

ほの暗くみえたあの会場にも、たくさんのひとがたくさんの理由を抱えて訪れて物語にして描いたら きっとどんなに素敵だろう、と

女性 描いてほしいわたしがいる

主宰 描きたいと思うぼくがいる

女性 描くべき風景と、物語だってここにあるのに！

主宰 「…一冊だけ。一冊だけなら、いい」

女性 「え？」

主宰 「一冊だけ描く…。認めるよ。レンズ越しじゃなく、現実を認めよう。
ぼくは描きたいんだ。だから描く」

女性 「ほんとうに？」

主宰 「ぼくは君と違って正直者だよ」

女性 「…楽しみです！」

主宰 「…描くのはパーティの話だ。あのパーティの絵本を描く」

女性 「きつと、きれいな話になります。ほんの少し、しあわせではないかもしれないけど」

主宰 「…そうだね。そんなふうになるのかもしれない」

女性 「一冊だけですか？」

主宰 「一冊、だけ…」

女性 「…」

主宰 「…」

女性 「あなたとはもうしばらく攻防戦を続けることになりそうです」

主宰 「なんでだよ！ 描くって言ってるのに」



女性「一冊だけなんて寂しいからです」

主宰「きみは妥協というものを知らないのかい」

女性「まあ」

主宰「そんな気はするけれど…」

女性「いざとなったらわたしがあなたを矯正します」

主宰「なんだって？」

女性「歪んだ現実はどうするんですか、主宰さん」

主宰「…矯正、します」

女性「そうします」

主宰「もうパーティには戻れないんだよ？」

女性「めがねもパーティもいりません」

主宰「わたしにとってはあなたが絵本を描かないことこそ歪んだ現実なんですから」

主宰「…めがねもパーティもなくどうやって矯正するつもりだい？」

女性「さあ。…力づく？」

主宰「それはあれだね。どちらかというと、強く制すると書くほうの、きょうせいだね」

女性「そうかもしれませんが、でも正しくするほうの矯正でもあります、わたしにとっては」

主宰「…いいよ。なんていうかそれは、いい」

女性「いいって？」

主宰「きみらしくないからさ」

君は現実を歪めたりしないで、伊達眼鏡で生きていけてしまう。それでこそきみだ

女性「そうですか」

主宰「そうなのさ」

女性「じゃあわたしがそんなことしないでいいように、あなたが描いたらいいんです」

主宰「…そういうことになるのかい？」

女性「そんなふうなふうになるのです」

主宰「長い攻防戦になるね」

女性「はい、負けません。…でもとりあえずは、その一冊を楽しみにします」

主宰「そうしていてくれ。…あ」

女性「どうかしましたか？」

主宰「いや、なんでもないよ。ただ、今度の絵本の冒頭を思いついただけさ」

女性「じゃあそれ、忘れないうちに帰りましょう」

主宰「…はいはい」

主宰 いつものまにか始まって いつものまにか終わっている

パーティへようこそ、紳士淑女の皆様 どうぞ楽しんでごゆっくり

招待の条件はたったのひとつ あなたのめがね ただひとつ



B パーティ

少年、舞台中央に座っている

少年「むかしむかしあるところに 僕らの暮らす世界とは遠く離れたどこかの場所に
あっちをみてもこっちをみても楽しいことしかないような世界に。

青山山の向こうにはお城の旗が揺れていて…」

(母親)「なにをしているのかしら」

少年「ああ、えっと」

(母親)「なにをしているのかしら」

少年「本を読もうと思っただけ」

(母親)「あら、ま。やめときなさいな、毒されちゃうわ」

少年「毒されるって?」

(母親)「しっかりと毎日堅実に勤勉に 正しく前をみて生きるのよ」

少年「…」

(母親)「しっかりと毎日堅実に勤勉に 正しく前をみて生きるのよ」

少年 まっすぐまえをみて 正しく前をみて 世界はいつだってひとつだ

…と思っていた。

それなのに。気づいたら、僕は場所に立っていた。

ほの明るい大きなホールのような場所。

穏やかな音楽がどこからともなく流れていた。

高い脚のテーブルの上には料理がたくさん載っていて、

いい匂いの湯気が立ち上る。

黒縁「やあ、こんにちは」

少年「ああ、こんにちは」

水玉「おはよー!」

黒縁「こんばんは」

水玉「ごきげんよう!」

黒縁「はうわーゆー」

少年「…」

水玉「見慣れない顔」

黒縁「君、パーティははじめてかい?」

少年「パーティ? なんの?」

水玉「みんなでめがねをかけるパーティよ」

黒縁「めがねをみんなでかけるパーティだ」

少年「めがねを…なんだって？」

黒縁「めがねをかけるのさ」

少年「どうして？」

黒縁「どうしてってそれはよくないな」

少年「よくない？」

水玉「聞き方がよくないの」

黒縁「ここでは、どうして、からはじまる質問はしちやいけないのさ」

少年 現れたひとは、わけのわからないことを謳うように言った。

けれどぐるりあたりを見回してみると。ぐるり、ぐるり、ぐるり。

見渡す限り、たしかにみんなめがねをかけていた。

柔い月の光のような灯りは、いつもだれかのレンズに反射している。

少年「やっぱり聞きたいんだけど。どうしてって」

黒縁「ほかの言いまわしで書いてごらんよ」

水玉「どうして、がだめなのよ」

黒縁「なぜ」どうして」はだめなんだろうね」

水玉「わからない」

少年は考え込むようなしぐさをしている。で、ハツとする

少年「ちょっと。なぜ、はいいわけ？」

水玉「いいの、みんなけっこう適当なのよ」

黒縁「だってこんなルール、あんまり昔からあるからね」

少年「昔からやってるパーティなの？」

水玉「いつ始まったのかしら」

黒縁「いつのまにか始まったのさ」

水玉「いつ終わるのかしら」

黒縁「いつの間にか終わるんだよ」

少年「不明瞭なことばかりじゃないか」

黒縁「そうかい？ 君にとって不明瞭でもほかの誰かから見たら明瞭だったりするよ」

少年「なんですかそれ」

水玉「そういうパーティなのよ」

黒縁「つまり君のレンズ越しには不明瞭でも、ぼくのレンズ越しには明瞭だったりする」



少年「は？」

水玉「ミス瓶底メガネをご存じ？ ひどく動物好きでね、彼女のレンズを通してみれば、

二足歩行のわたしたちも四足のふわふわしたうさぎさんになっちゃうの」

黒縁「みえるかな、あっちにいるフレーム・レス、彼は大変な偏食家だ。

ローストポークにシーザーサラダ、甘いプディング、彼は全部嫌いだね。

けれどこのパーティで彼が口に含むのはぜんぶ彼の大好物に変わるのさ。そう」

黒縁・水玉「かため・こいめ・すくなめ！」

少年「何の呪文、それ」

黒縁「君は知らないのかい？ フレーム・レスほどではないにせよ、

数多のひとを魅了してやまない味だというのに」

少年「味にメガネは関係ないだろ？」

水玉「そんなことないんだよ」

黒縁「味も音も感触も、要するに世界をみるってことだからね」

少年「…なんか、そういうの、やめてよ」

黒縁「ん？」

少年「そういう、なんていうかさ」

水玉「どういうのかしら」

少年「そういう、まわりくくどい言い回しをさ！ はっきりわかるように言ってよ」

水玉「まわりくくどいかしら」

黒縁「いいや、わからないなあ」

水玉「でも言われてみたらそうなのかもしれないわ」

水玉 はじめてみるお客様、今夜の小さなお客様。

彼は地面をにらみつけるように、じっとり俯いていた。

それは無意識に、わたしから、わたしたちから、目を背けているようにもみえた。

少年、はげようとする

黒縁「おや。どこにいくんだい」

少年「意味がわからない、こんなところ。きっと歩いたら目が覚める。

見慣れた寝室の天井があるはずなんだ」

水玉「混乱してるんだよ」

少年「それに。このパーティのことはちょっとわかったぞ。要するに現実逃避だ」

黒縁「おや、なるほど」

水玉「現実逃避ですってよ」

黒縁「現実逃避かあ」

少年「そうだろ」

黒縁「僕らが悪いんじゃない 現実っていうのが直視するには歪みすぎて

僕らは現実をみるために、矯正してるんだよ」

少年「逃げてるってことだ」

水玉「あたまの硬い子」

黒縁「いいじゃないか。もうすこし話していこうよ」

少年「…それなら、あんたはどうしてめがねをかけるの？」

偏食家だから？」

黒縁「おっと。その質問は失敗だね。“どうして”の質問だ」

少年「…あ」

水玉「答えられません！」

少年「…あんたは、なぜめがねをかけるんだ」

黒縁「生憎だけど。それには答えないでおこう」

少年「さっきはよかったのに！」

黒縁「そんなものさ さっきまでよかったけれど今はだめ、なんてあんまりよくあることさ」

味蔵 [心づ、兼也殿總折の町心づ]

長田 [折折しん、殿總折の町心づ]

少井 [折入、皿折こま折、折折、折折折折折]

味蔵 …折籠の折折折折折。

少井 [折折折折一]

少年「そんなことはわかってるよ！でも、こんなのぼくかけてなかった」

黒縁「めがねをかけてないとパーティには入れないからね」

水玉「そう。それがルールだもん」

黒縁「君はこのパーティにいるってことはめがねをかけていたんだよ。

めがねをかけていることこそこのパーティにいるってことなんだから」

少年「だって僕は現実逃避なんてしてない！」

水玉「でもここにいるんだから」

少年「ぼくはこんなふわふわした変なところ大嫌いだ。帰る！」

黒縁「そうか、せっかく出会えたのに残念だな」

水玉「そうね」

黒縁「じゃあ少年。パーティを楽しんでね」

少年「あ、おい」

黒縁「さあ、行こうか」

水玉「うん」

少年「どこだよ」

黒縁「君に言ったんじゃないよ。君も好きに行ったらいいさ」

黒縁・水玉、はげようとす

水玉、はけたタイミングで少年ハツとして

少年「待って」

黒縁「ん？」

少年 咄嗟に言葉が唇から滑った。呼び止めたけれど、特別用があるわけじゃなかった。

ただ、ただ、このわけのわからない場所ですりになるなら、

いくらわけがわからない彼でも、…と思わないこともなかった。

黒縁「ああ、さっきの話かな？」

少年「え？」

黒縁「ぼくがきみに禁じた、どうしての話がまだ気になるのかな」

少年「え、ああ、えっと、そう、あんたがどうしてめがねをかけてるのか聞いてない！」

黒縁「ぼくはお伽噺をみてるんだ」

少年「お伽噺？」

黒縁「ぼくはお伽噺をみて、そうしてみせていて、きれいな世界をゆるやかに歩いている」

少年「わけがわかんないよ」

黒縁「昔から好きなんだ。絵本とか。きみはどうだい」



少年「読んだことないからわからない」

黒縁「読んだことがないだつて？」

少年「…そうだけど、なに？」

黒縁 ページを開く、紙の擦れる音。

良く晴れた日、絵本の景色は柔らかい陽の光のなかに浮かんでくるようだった。

優しい皺がれた声が物語を読んで、つやつやした絵に指先で触れる。

そんな幼い日の思い出は、今も瞼の裏にしっかりと残っていた。

少年「母さんが嫌いなんだ、そういうの」

黒縁「堅実に勤勉に？」

少年「そう」

黒縁「僕とはまるで違うみたいだ。

僕はきれいなお伽噺と生きて、お伽噺のなかで息をして、

そしてー お伽噺に恋をしたよ」

少年「なんだって？」

黒縁「少年、そうだな、きみは丸メガネをかけているから丸メガネくんと呼ぼうか。

あ、僕は黒縁眼鏡だから黒縁。改めてよろしく」

少年「…うん」

黒縁「丸メガネくん、きみはまだ幼いのに。もったいないよ、そんなことじゃ」

少年「なにが」

黒縁「僕も君から見たらお兄さんというのに当たるんだろう。

そうさ、ひとは長く生きているほうが常になにかを与える側さ

…水玉はもう、そのあたりにはいないよな」

少年「水玉？」

黒縁「ちょっと待ってくれ」

少年 黒縁はそういうと、辺りを見回してからゆっくりとめがねを外した。

そしてぼくのほうにゆっくりと近づいてくる。 一歩

黒縁 二歩

少年 三歩

黒縁、少年のめがねを奪う。代わりに自分のめがねをかける



少年「うわ、なんだよ！」

黒縁「長く生きているほうから、一夜限りのプレゼントだよ

俺のみにているお伽噺を、きみにもみせてあげよう。

お伽噺をみせるのは慣れてるんだ。代々ね」

少年「余計なお世話だ、やめてよ」

黒縁「ああどうか、手荒に扱わないでくれよ。大事なものなんだ」

少年「そんな大事なものを簡単に渡すほうがわるい」

黒縁「それは乱暴ってもんだ」

少年「あんたのほうがよっぽどはちやめちやさ。」

第一、このパーティーめがねがないと参加できないんだろ。 どうするんだ」

黒縁「心配ない。スペアがある」

少年「うわ…」

黒縁「でも、どうか、手荒に扱わないでくれ。大事なものなんだ。

それだけは、とびきり特別なんだ」

少年「じゃあ返すから」

黒縁「一夜限りだ、朝になるまえに返してもらいに戻ってくるから」

少年「朝だって？ てことは今は夜なのか。このパーティーは朝になったら終わるのか」

黒縁「今がいつなのかも、パーティーがいつ始まっていつ終わるのかも、

誰にも何にもわかりはしないよ。

だから、俺が朝だと思ったら、一夜限りのお伽噺を返してもらうってだけさ」

黒縁、はける

少年「いらんってば！ ああもう、いらんっていうのに…」

少年 パーティの会場は確かに“いつ”も“どこ”もわからなくなってしまうようだった。



水玉「いま」

少年「いまか」

水玉「わたし、黒縁がいつまでも来ないから探してたんだけど」

少年「黒縁っていうのは、このめがねの持ち主だろ」

水玉「そうそう」

少年「それなら僕にめがねを渡してどっかに行ったよ。」

もう人ごみの中で、見つからない」

水玉「いつ帰ってくるって言ってた？」

少年「朝だって。でもいつかわからない、あのひと基準の朝らしいから」

水玉「ふうん、なるほど」

少年「あんたもめがねをかけてるんだな」

水玉「そうよ、このパーティにいるんだもん」

少年「あんたはあのひとのなに？」

水玉「さあ、なにかなあ」

少年「恋人？」

水玉「そんなふうなふうかもしれないけど、違うかもしれない」

少年「わかんないってこと？」

水玉「内緒ってこと」

少年「なんだよ。…あの黒縁がどうしてもめがねをかけてるのかあんたは知ってる？」

水玉「どうしての質問は」

少年「わかってるよ。でもぼくがいま聞いたのは知ってるかどうかだ。」

WHYじゃない、DO YOUだよ」

水玉「そうだね」

少年「なんで笑うんだ」

水玉「楽しくて面白いから笑うの」

少年「なんで楽しいんだ」

水玉「あなたが楽しいから」

少年「なんであの黒縁はめがねをかけてるんだ」

水玉「さあ」

少年「それは、わかんないってこと？ 内緒ってこと？」

水玉「わかんない」

少年「わかんないのか」

水玉「そんなふうなふうになるんじゃないかな」

少年「不明瞭だ」

水玉「そうやって矯正されているの」

少年「強制？ 無理やりそうされてるってこと？」

水玉「いいえ、その強制、じゃなくて。正しくされる、って意味の矯正。

でもその勘違い、けっこうおもしろい」

少年「あんたもまわりくどいっていうか、ふわふわ話すんだね」

水玉「そうかな。自分ではわからない」

少年 このパーティのひとと話していると、なんだか僕まで現実から離れてく

堅実で勤勉な、ましかくの日常から離れてく

ぼくはまるで暖かいミルクのなかの角砂糖のようで

パーティの空気は、うっかりぼくをとろかしてしまっそうだった

水玉「認めちゃったらしいのに」

少年「は？ なにを」

水玉「あなたも現実をまっすぐみられなかったんだね」

少年「これは何かの間違いなんだよ」

水玉「あなた、何のために彼の「どうして」をそんなに知りたがるの」

少年「それはあれだよ。ただ、悔しいからさ。あいつの訳知り顔がね」

水玉「ふうん…」

少年「なんだい」

水玉「でも、黒縁のめがねをかけてるんですよ。きっと自然にわかるよ」

水玉 はじめて来たお客様、今夜の小さなお客様。

彼はこのパーティで「どうして」が禁止の理由を、きっとわからない。

彼のめがねの理由を探す、不躰で、無鉄砲で、でも誠実な男の子。

少年「ああでもそうだ、あいつ。お伽噺をみせてやるとか言ってたのに」

水玉「お伽噺？ 黒縁がそう言った？」

少年「ああ言った。あんた、意味わかる？」

水玉「わかるわ。絵本が大好きなの、彼」

少年「それは聞いた」

水玉「なかでもお気に入りには少年と少女の絵本」

少年「ふうん。どんなの」

水玉「少年と少女がね、いろいろなところに行くのよ」

水玉 その世界には輪郭がない。黒い、細い、硬い、物体を縁取るものはなにもない。

世界はぼんやりと、けれどたまらなく鮮やかだった。



木漏れ日の森。銀の魚と海の底。もこもこ雲の上。

そんな世界を、少年と少女がぱたぱた、ぱたぱた、と

かろく かろく 走り回って。

それは、その世界は、たまらなく美しい。

水玉「ーみたいな感じ？」

少年「絵本だなんてあんなの、現実がないことだ。

現実がないことをみたって、なんの役にも立たないよ」

水玉「ずっとそうやって思ってきたんだね」

少年「そうだけど」

水玉「それで、疲れちゃったんだねえ」

少年「だから、そんなんじゃないって言ってるだろ」

水玉「あのね、絵本はしあわせをくれるよ」

少年「しあわせ？」

水玉「あなたの言うみたく、現実をまっすぐみるのもきつと大事だけど

ほんの少し、都合よくゆがめられた現実は、たまにはしあわせをくれるよ」

少年「そんなの、甘えてるよ」

水玉「でも、しあわせだよ」

少年「…よくわかんないね」

水玉「ねえ、いい機会だわ。わたしに協力して。

えーっときみは丸メガネだから、丸メガネくん」

少年「ネーミングセンスかぶってるよ」

水玉「ちなみにわたしは水玉」

少年「水玉？ なんで」

水玉「つるの内側が水玉模様なの、かわいいでしょ」

少年「どうでもいいんだけど」

水玉「つれないなあ」

少年「…ていうか、協力ってどういうこと」

水玉「ああ、そうそう。あのね、もうすぐ朝なの」

少年「朝？ あんたには時間がわかるのか」

水玉「違う違う。ここはいつもどこもないもの、朝なんて誰にも分らない。

わたしが言いたいのは、黒縁にとつての朝が来るってこと」

少年「いや、え？ だってあのひとがここからいなくなつて五分くらいだよ」

水玉「でも彼つてああみえて臆病なところがあるから。そんなに長い夜には耐えられない」

少年「あほなのか？」

水玉「とにかく、もうすぐきつと来る！」



少年「なんでもありじゃないか」

水玉「そんなものだって。…あ、黒縁が来てわたしがここにいるの、内緒にしてね」

少年「は？ どうして。あんた、あのひとを探してたんだろ」

水玉「どうしての質問は」

少年「あーもう！」

水玉「…あのね、わたしはあのひとを探してた。でも、探してたのはあのひとじゃないの」

少年「は？」

水玉「お伽噺だよ」

少年「ふわふわしゃべるのやめてくれないかな」

黒縁「丸メガネくん。どこにいる？」

少年「あ。ほんとうにもう来るじゃないか」

水玉「いい？ 内緒だからね、わたしがいるの」

少年「わかったよ。でもそれなら、隠れるなりなんなり」

水玉「ああ、それは大丈夫。だって彼 わたしのこと見えないんだから」

少年「は？」

黒縁、入ってくる

黒縁「あ。いたいた」

少年「…っと」

黒縁「朝だよ。ほんとうの時間は相変わらずでわからないけれど、朝さ。

よかった、手荒には扱ってないようだね。ささ、それを返してもらっていいかい」

水玉「返さないで、まだ！」

少年「え？」

水玉「こっち向かない！」

水玉、本で少年を殴る

少年「痛っ」

水玉「痛いとか言わない！」

水玉、少年をはたく

少年「く〜！（うなづく）」

黒縁「え、大丈夫かい？」

少年「なんでもない…」



黒縁「…ねえ、そこに彼女、いるのかい？」

少年「えっ」

水玉「いない！」

少年「いない、いないよ」

黒縁「…ほんとに？」

水玉「ほんとう。わたしがあなたに嘘をつく理由なんてないでしょ」

少年「ほんとうだよ、あのひとがあなたに嘘をつく理由なんてないだろ」

黒縁「うん…まあ、それもそうか」

少年　スピアだというめがねをかけた黒縁は、ほんとうに彼女が見えていないようだった。



黒縁「祖母じゃない。祖母はおれと同じで、祖父の絵本が大好きだったひとだ」
少年「へえ…じゃあその恋人は」

黒縁・水玉「…死んじゃったんだ」
少年「え？」

黒縁「死んじゃったんだよ。病気でさ。祖父は彼女の話もよくしてくれた」

黒縁 彼女の細い腕は白く、いっそ青く、透けてしまっそうだった。

或る夜、あの夜、いよいよ彼女の手は透き通り、空気に溶けてしまわんとしていた。
僕はその手を取って、ああ、なんとかその色彩を取り戻そうとするのだった。

黒縁「ねえ 大丈夫かい？ よもやこのまま、消えてしまったりしないよね」

水玉 彼の大きな手が、私の手を握る。

けれど私は、私自身が、彼の指の隙間をすり抜けていくのがわかってしまうのだ。
きっともう長くはここに留まれないと、そのとき私は彼の目を見た。

少・黒縁 硝子の レンズ越しの

水玉 あなたの

黒縁 僕の

水・黒 目を

水玉「もしも私が消えてしまっても 待っていてちょうだい

黄泉の道は暗いというけども きっと会いに来るわ

だからあなたも ねえよく見てちょうだいね」

黒縁「祖父の恋人は死の間際に彼と約束したんだ。戻ってくるって」

少年「…戻ってきたの？」

黒縁「いや。それが、戻ってこなかったんだ。

祖父はひどく悲しんだけど、でもそれさえもお話にして、そして祖母と結婚した。

おれが話を聞くころには、その恋の話はすっかりお伽噺だったよ」

少年「お伽噺…」

黒縁「何年前か前、祖母が亡くなった。そしてその祖母を追うように祖父も死んだよ。

けんかばかりのようにみえて、すごく仲がよかった。

それで、葬儀のあと遺品を整理しているときだった」

黒縁 祖父と祖母の部屋は、畳と、障子の向こうの季節の花の匂いがした。

ちょうどそのときは、蠟梅の匂いがしていた。

祖父の使っていた桐の戸棚をあける。そこには祖父の古い服と、めがねが入っていた。

会場に満ちたレンズと、そこに反射する光が 囁くようだった。

「直視に耐え兼ねる現実なら 歪めて矯正したらいい」

黒縁、水玉にめがねをかける

黒縁「…久しぶりだね。僕はこうして、変わらず君を待ってたよ」

少年「ふりしたってこと？」

黒縁「祖父は優しい言葉を使うひとだった。記憶の中の彼の声は皺がれてこそいたけど、いつだって瑞々しく、穏やかに話すひとだった。

大好きだったから、真似できると思ったんだ」

少年「…だまされてるんじゃない」

水玉「わたしに言ってるの？」

少年「…」

黒縁「言ったらう。ぼくはお伽噺をみて、そしてみせてるんだって」

少年「それ、ばれないの？」

黒縁「彼女本人に？ ばれないように頑張ってるからさ」

少年「へえ…」

黒縁「彼女はずっと祖父を探してたんだ。約束通り会いに来たんだ。

それなのに祖父は別のひとと結婚してしまって、そのうえ死んでしまったなんて

きつとショックを受けるよ」

少年「歪んだ現実ってこと？」

黒縁「その通りだ！ きみもどうやらこのパーティに慣れてきたみたいだね」

少年「歪んだ現実を歪めるって、そういうこと」

黒縁「そうさ。 きみには、よくないこととみえるのかもしれないけれど」

少年「僕は… …そうだな」

黒縁「けれど、彼女と話をしたならわかったんじゃないかな。とっても素敵だったろ」

少年「まあ、素敵と言えないこともなくないかもしれない」

黒縁「まわりっくどいなあ」

少年「あんたらには言われたくないよ」

黒縁「おれはね、ずっと祖父の物語に出てくる少女に憧れてたんだ。

言ったら？ おれはきれいなお伽噺とともに生きて、お伽噺のなかで息をして、

そして御伽噺に恋をしたんだって。

おれが君くらいの少年だった頃の、幼く淡い初恋は、水彩絵の具の彼女のものだった」

少年 彼のめがねは、否、正確には彼の祖父のめがねだ。

それは僕に不意に美しい景色をみせる。フィルムみたいに視界を流れる。

黒縁 「はじめ、祖父を名乗るのは彼女のためだ、みたいな言い方をしてしまったけどね
それはずるいってものだね」

少年 木漏れ日の森 海の底と雲の上

黒縁 「おれはうれしいんだ

彼女が笑ってるってそれだけでおれはとびきり嬉しくなるんだ

おれは彼女が好きだから」

少年 そこをかくく走るの、あの彼女だ。

黒縁 「たしかにまっすぐ向き合った現実ではないけれど

その代わりにおれは彼女と向き合えるんだ」

少年 「そうだね」

黒縁 「尤も、きみからしたらやっぱり受け入れ難いものがあるのかな。

真面目で勤勉なものではないものな」

少年 「…まあたしかに」

黒縁 「けれどおれはね、僕も幸せで彼女も幸せならそれでいいんじゃないかと思えてしまう」



水玉「返さないで！」

少年「…もう少し貸しておいてほしいんだけど」

黒縁「それは困るよ。なんだい、まさか君も彼女に恋してしまったとか」

少年「いや、そんなんじゃないけど」

黒縁「うーん わけもわからずにはなんだか怖いんだが、

ううん、ここではどうしてと尋ねることはできないものな。

けれど、俺だってあんまり長いことそのめがねを、

ひいては彼女を失っているのは寂しいよ」

少年「どうして…えっと。えっと、ほら、あれだ。朝じゃないんだもの」

黒縁「え？」

少年「あんたは朝だって言ったけど。僕にはまだ朝じゃない、夜なんだ。明けてない。

星だって零れそうなくらいだし、月がまだ天頂に居座ってるのがわからない？」

黒縁「…驚いた」

少年「それに、えーっと、なんだろう」

黒縁「いやいや、いいよ、わかった。君の朝まで貸してあげよう」

少年「ほんとに？」

黒縁「それにしたって君は、なんだかずいぶんとふわふわしたことを言うね！」

少年「ふわふわ？」

黒縁「まわりつくどくて、ふわふわした」どうして」だ。朝が来てないだって？

詩的だ。詩的だけど。とっても素敵だ」

少年「僕そんなつもりじゃ」

黒縁「なかったっていいのかい？」

それこそきみ、俺がきみと彼女を会わせた甲斐があったってものだ！」

少年「ああもう、なんだかなんでももういいから 貸してくれるんだね？」

黒縁「いいよ。貸そうじゃないか！」

少年「ああよかった。ありがとう」

黒縁「うん。…でも、願ってるよ。君の夜がはやく明けますようにってね。

俺にはもう今夜の星空は見えそうにないから、やっぱり寂しい」

少年「わかった」

黒縁「じゃあ、よい夜を」

黒縁、はける

少年「…ねえ。行ったけど」

水玉「うん。ありがとう」

少年「…」

水玉「なに？」

少年「なんか、うん、そういうことみたいだけど」

水玉「さっきの話？」

少年「そう」

水玉「黒縁からやっとな話を聞いた。きみのおかげだね、ありがとう」

少年「ありがとうって言われても」

水玉「どうしたの、変な顔をしてるね」

少年「だって」

水玉「わたしが騙されてるんだってさっき言ってたよね」

少年「…いや、だって、そういうことでしょ」

水玉「それがそうじゃないんだな」

少年「え？」

水玉「わたし、知ってたんだな」

少年「…え？ えー？」

水玉「黒縁がわたしの待ってたあのひとじゃないなんてとうにわかってるの」

少年「でもあんたの、そのめがねは」

水玉「ああ、黒縁の姿をあのひとの姿に見せてくれたよ、たしかに。

でも今は違うの。こっそりすり替えたの」

少年「すり替えた？」

水玉「伊達だよこれ」

少年「伊達…ってルール違反じゃないの？」

水玉「ルール違反らしいけど。昔からあるルールだから結構適当なの」

少年「適当すぎる。もはや必要なのかわからない」

水玉「ルールが先じゃなくて必要が先なんだから、必要がないときはいいのよ」

少年「きみらの言うことは矛盾にまみれてるよ」

水玉「慣れてきたでしょ」

少年「不本意ながらね」

水玉「案外あたまが柔らかいのかもね」

少年「で、どういうこと？ あんたは騙されてなかったってこと？」

水玉「だまされたっていうのは人聞きが悪いんじゃない？ わたしにも彼にも」

少年「でもさ、そういうことじゃん」

水玉「最初はわたしが勝手に間違えただけ。黒縁はそれに合わせてめがねをかけてくれた。

それで、しばらく気づかなかった」

少年「でも、今は気づいたんだろ」

水玉 彼はわたしに話した、わたしと歌った、わたしと歩いた。



いつどうしてどこでどうやって気づいたのかはわからない。

でも小さな違和感は、この会場の隅々に落ちていた。

ふとしたときの仕草や声色 頬の香り

水玉「…とにかく、いろいろ違うの。やっぱり」

少年「そういうものか」

水玉 度数の合わなくなったレンズは、かえってわたしの目に違和感ばかりを訴えた。

だからそっと、彼の見ていないところでそっと めがねを外して

偽のレンズにすり替えた。度の入らないレンズにすり替えた。

霧が晴れたような視界のなかで、

似ているようで似ていない彼はとても穏やかに笑っていた。

少年「いよいよ別人だってなったわけだ」

水玉「そう」

少年「誰かはわからなかったの？」

水玉「なんとなく考えはした。でも、正確にはわからなかった」

少年「なるほど」

水玉「それで、今日。あなたを使わせてもらいました」

少年「…なるほど」

少年 レンズの向こうの少女の瞳はきらきらと潤んでいた。

この瞼がずっと昔に閉じられて、一度は光を失ったなんてまるで信じられなかった。

少年「でも、ちょっとなんだね」

水玉「だっていまは黒縁がいてくれるから」

少年「黒縁が好きだから、もうおじいさんのことはいいってこと？」

水玉「そういうわけではなくて。」

ううんと、黒縁が好きだから、ってことにはなるんだけど。

わたしとあのひとが一緒に過ごした日々が絵本になって、

それを好きだというひとが現れて、ふたりがおたがいを愛して

そうして時間が巡って、世界が廻って、黒縁が生まれて……って

素敵なことだと思えるの

どうして素敵だと思えるかって、わたしは黒縁が好きだから」

少年「じゃあ、あのひとは独り相撲をしてるってわけだ」

水玉「独り相撲？」

少年「だって黒縁は、あんたにほんとうのことがばれないようにしてたんだって。

なにあなたは全部知ってるっていうんだからさ」

水玉「滑稽だって思う？」

少年「コツケイ？ 滑稽か、ちょっと思うかな」

水玉「でも、ちょっとなんだね」

少年「だってあのひとって、ちょっと優しいだろ」

水玉「そうだね、ほんとうにそうだね」

少年「なんで笑うんだ」

水玉「嬉しくて面白いから」

少年「なんで嬉しいんだ」

水玉「あなたが認めてくれたからかな」

少年「認めた？」

水玉「わたしのことを」

少年「あんたのことを？」

水玉「黒縁のことを」

少年「あのひとのことを」

水玉「黒縁はお伽噺をみて、わたしにお伽噺をみせるひと。

そしてわたしは、ねえ。わたしは誰？」

少年「あなたは」

水玉・少「お伽噺の少女」

水玉「あなたもふわふわしてまわりつくどくなってきたわ！」

少年「そんなようなふうになったのかもしれない。ちょっとだけね」

水玉「ようやくパーティが楽しめそうだね。ゆっくりしていきなよ」

少年「でも、そうだな。とりあえず、そろそろ朝にしてあげなきゃ」

水玉「あ」

黒縁入ってくる

黒縁「…あ。いや、まだ夜は明けそうにないのかな。それとも鶏はもう鳴いたかい？」

少年「あんたほんとうに寂しいんだな」

黒縁「長い夜は誰だって寂しいものだよ！」

少年「はいはい」

水玉「結構かわいいでしょ」

少年「結構うっとうしいと思うんだけど？」

黒縁「水玉がそこにいるのかい？」

少年「そうだよ。本当にみえないんだものなあ」

水玉「まあ、そうね」

少年「…こうしていると、ぼく、すごく変な人に見えるんじゃないの？」

黒縁「いまさらなことさ。ここではそんなことばかりだよ」

少年「まあ、そうだろうけどね」

黒縁「君、このあとどうするんだい？」

少年「パーティのこと？」

水玉「あなたの目には変なことばかりだからね」

少年「まあ、そうだろうけどね」

水玉「このあとに変なことばかりが起きるんだよ」

少年「このあと…どうしようかな。でも」

水玉「でも？」

少年「ふわふわしたパーティも、思っていたより悪くはないかも」

黒縁「おお」

水玉「おお」

黒縁「いま彼女も同じ反応したろ」

少年「さすが」

黒縁「もちろんだとも」

少年「でも、あくまで思ったより悪くなかったってだけだよ。

だって、まだよくわからないもの」

水玉「なにが？」

少年「お伽噺とかさ。あんたたちの話は聞いたけど、でも実際読んだことないもの」

黒縁「それなら、絵本を読んだらいい」

少年「好きだね」

黒縁「よければ僕…が描いたものでもどうだい？」



少年「え？ 描いたって、あんたが？」

黒縁「そうさ、僕が」

水玉「つまり、彼のおじいさんの絵本ってことね」

少年「ああ、そっか」

黒縁「…ところで、あの？」

少年「ん？」

水玉、めがねをトントンする

少年「ああ！ すっかり忘れてた」

黒縁「いや、すまないね。あの、もういいの？」

少年「うん」

黒縁「それなら、うん、長い夜はやっぱりその、寂しいから」

少年「はいはい」

水玉「ねえ。あのね」

少年「うん？」

水玉「ありがとうね、いろいろ」

少年「…はいはい」

少年、メガネを返す

水玉「ただいま、ちょっと久しぶり」

黒縁「ちょっとだって？ 僕にはずいぶん長く感じられたけど」

水玉「大げさなんだから」

少年「…うん。やっぱりまだ慣れそうにないや。すごく変な人にみえる」

黒縁「おいおい慣れるさ」

水玉「とりあえずは絵本からはじめたらいいよね」

黒縁「そうだね。僕も、君も、だいすきな絵本なもの」

少年「…あんたらはこのあとどうするの？」

黒縁「このあと？ パーティのことかい？」

少年「そうだよ」

水玉「そんなのふつう決めることじゃないわ」

黒縁「決めることじゃないって」

少年「適当だな」

黒縁「でも、そろそろ行くよ。向こうにがいたんだ。三角レンズさんところのご子息がいた。

彼とは真実しばらくぶりだから話がしたいや」



水玉「あら。素敵」

黒縁「きみも一緒に来るかい？」

少年「ぼくはいいや。…いい、からその」

黒縁「ん？」

少年「読ませてよ。あんたの絵本」

水玉「あら！」

少年「気が向いてるうちにさ。あとからやっぱりこんなところ嫌になるかもしれないし」

黒縁「もちろん、喜んで！」

少年「…ありがとう」

黒縁「ぼくが一番のお気に入りは、少年と少女の物語なんだけどね。

きみにはこれをおすすめしよう」

黒縁、本(主宰の台本)を渡す

黒縁「君がたっているこの場所の物語さ」

少年「パーティの話ってこと？」

黒縁「開いてごらん」

水玉「ぎっと楽しめるわ」

少年、本を開く

少年 いつのまにか始まって いつのまにか終わっている

少年・主宰 パーティへようこそ、紳士淑女の皆様 どうぞ楽しんでごゆっくり

招待の条件はたったのひとつ あなたのめがね ただひとつ

